

常滑焼

常滑は、日本六古窯のひとつとして知られ、1000 年以上の歴史を持つ陶磁器産地である。

そのため、常滑の歴史と経済発展は焼き物と切っても切れない関係にある。

常滑市周辺の環境は、陶器の生産に適していた。良質な粘土が豊富に供給され、柔らかい土となだらかな丘陵地は穴窯を掘りやすかった。さらに、知多半島に位置していたため、完成品を運ぶための海へのアクセスも容易だった。

常滑焼の発祥は 12 世紀初頭で、陶工たちが作り始めた大型の貯蔵瓶や調理器具はすぐに全国に広がった。19 世紀に中国から伝来した技術により、鉄分の多い赤土を使った常滑名物の急須が作られるようになった。

1830 年頃には登り窯が登場し、エネルギー効率の良い大量生産が可能になった。19 世紀後半、日本が急速に近代化すると、常滑では瓦や排水パイプが生産されるようになった。大規模な陶磁器生産は 1950 年代にピークを迎えた。

ここ数十年、生活様式の変化や海外での関心の高まりにより、常滑焼はさらに多様化した。職人たちは嗜好の変化に対応し、伝統的な技法と現代的な技術革新の両方を取り入れながら、常滑焼を繁栄させていった。招き猫の置物や盆栽鉢、赤土の急須などは、今日の人気商品のひとつだ。常滑焼については、「やきもの散歩道」B コースにある「とこなめ陶の森」でより詳しく知ることができる。